

私の考える絵本の言葉

内田 麟太郎

絵本には絵本の言葉がありますと、私に示唆してくれたのは長新太だった。

長は、こういった。「ぼくたちの仕事には、絵本と、挿絵と、絵童話があります」。絵本はわかったが絵童話がなんなのかわからない。尋ねると長はこう答えた。「宮沢賢治の童話などに絵をつけるのがそうです」「それも絵本ではないのですか」「ちがいます。絵本には絵本の言葉があります」。

絵本の言葉は文学ではない

ほぼということにしても、私たちは宮沢賢治の作品を読むとき、「これは文学だ」と感じているはずである。言葉のひとつ賢治は、言葉以外のなものにも頼っていない。音にも、光にも、絵にも。なにものにも頼らず自立している言葉、それが文学だろう。

だが、絵本の言葉はそこがちがう。はじめから絵を想定している、もしくは必要としている。もっといえば絵がなければ歩くことも、立つことも出来ない言葉である。たとえば西村繁男と私の絵本『がたごと』がたごと（童心社）

の言葉はつぎのようになっている。

おきやくが のります ぞろぞろぞろ／ がたごと
がたごと／がたごと がたごと／がたごと がたごと
おきやくが おります ぞろぞろ ぞろぞろ

これが十五場面分で三回くり返されている。いくら読み返しても文学的感動が湧いてくるということはないだろう。にもかかわらず、私がこの言葉を選んだのは、この言葉こそが西村との絵本を成功させると、確信したからだった。

「一緒に絵本を作ろうよ」と西村から誘われたとき、私が一番考えたのは、どうすれば西村が一番よろこんでくれるだろうかということに尽きた。うきうきと西村が絵を描いてくれる絵本テキストとはどんなものだろう。それを考えることが、私のうきうきだった。西村の絵にはユーモアがあ

